

視覚美と聴覚美

山内 恭彦 (物理・名誉教授)

一昨年末、古稀祝賀に対する多くの方々への御芳志に対する御礼として、“雑騒”という甚だ物騒な表題を付けた雑文集を自費出版してお届けした。もっとも出版費の大部分は祝賀宴のとき集めて下さった浄財によるもので、その上数社の出版社の編集員諸君の献身的骨折りがあったものだから、“自費”というのはいささか当らないが、とにかく、奥付の定価のない書物を作ったのは愉快であった。部数が余ったので、平素御懇意を願っている方々にもお目に掛けた。

私は商売柄、多くの方々から書物を寄贈されるが、これはお互いのことと思って、滅多にお礼を書いたことがない。ところが、この雑文に対して沢山の礼状が寄せられたので、しまった、今迄大変失礼なことをしていたと始めて気がついた。物が物だけに、集ったお便りにはなかなか面白い批評もある。“雑騒どころか颯爽たるものです”などと、文学者に賞められたりして大いに気をよくした。(大変敬老精神に富んだ方だと感心した。) 思い掛けなかったのは、自然科学者畑の諸君からの礼状の中に、漢詩2首、和歌、俳句それぞれ数首ずつを発見したことである。しかもこの作者の中には、私から見ると、随分若い方々も含まれている。C. P. Snow の“2つの文化”というのはいささか日本のことではないらしい。その後、朗人宗匠からも“母国”という句集を贈られた。

ここに取上げたいのは、医学部の先生だった吉田富三さんの俳句論である。吉田さんといえば、吉田肉腫(独立した生きた1個の癌細胞)で世界に名をとどろかせた癌の大家で、恩賜賞、文化勲章の榮に輝く我が学界の誇りであったことは御承知と思う。惜しくも昨年逝去された。私個人としても、よい友人を失ってまことに残念である。彼が一昨年贈ってくれた随想集“生命と言葉”の中に、“俳句と漢字”という小論がある。

吉田さんといえば、国語審議会で、“国語は漢字仮名交りをもって、その表記の正則とする”という提案をされて、大議論の種を播いたことは御記憶の方々もあろう。彼の俳句論は、要約すれば、俳句は知性の詩で、目で見ると漢字がエッセンシャルであるというのらしい。芭蕉、蕪村から鬼城、蛇笏、虚子、達治などの名句を数多く引用して説明してあって、傾聴すべき点が少ないと思われる。(ただし、こう名句ばかり並べた本

の巻末に、自作未発表の百句を附けたのは少々まずかった?) ここで感じたことは、彼の美感が大変視覚的だったことである。

虚子の“行く秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲”は“行く秋や五重の塔に雲一つ”で十分であるという。たしかに、晩秋の澄み渡った青空に聳え立つ塔の上に、一片の白雲が流れかかっている状景、視覚的美としては十分であろう。しかし薬師寺の塔—これは実は三重の、あるいは見方によっては六重の塔である—といえ、遠く白鳳の文化がしのばれる。その塔のてっぺんの水煙には例の天人のすかし彫りの麗麗な姿が輝いている。そういう懐古的なあこがれは俳句では表わされていない。さらに、31字の中に6字の“の”の字を反復させる快いリズム感、17字の中には全く失われている。

そういえば、子規の写生論からもうかがわれるように、俳句には一瞬の状景を固定させた、絵画的のものが多し。蕪村の“春の海ひねもすのたりなかな”などは多少の時間的経過、リズムが感じられるが、やはり実朝の“大海のいそもどろによする波 われてくだけてさけて散るかも”のような動きに及ばない。

そう思って吉田さんの本を見直すと、セザンヌ、ゴッホ、ゴヤなどの絵画に深く心を寄せられた文は見出されるが、音楽に言及したものは一つもない。

物理学者には、プランク、アインシュタインなど音楽に堪能な人が少ない。我々の仲間にも、楽器を演奏する人は少ない。数学、理論物理のようなものは、論理をたどるものだから、やっぱり一瞬に感じとるものよりは、時間的経過に従って流れるものの方がびったりするのかもしれない。しかし、こういうものはどちらかというとな情的なもので、知的とは縁が薄い。いつも知的なものに没入しているから、時に情的なものに逃避するという言い訳もあろうが、それには何も音楽でなければならぬ必然性はなさそうである。

孔子は“詩に興り、礼に立ち、楽に成る”といった。この詩は俳句に限ることはなからうが、視覚美、聴覚美の双方に通じるのが理想であろう。久保亮五君や、霜田光一君の音楽は古くから聞かされていたが、両君が絵も上手なことを近頃初めて知って、大いに心を強くした次

第である。そのうち両君から快心の作一枚ずつ、この原稿料の代りに？ 頂戴できることを楽しみにしている。
